

ニューカマー支援のあり方についての考察
筆者自身の異文化体験の分析から

学籍番号：12992002

氏名：青葉 晴子

指導教員名：立木 茂雄 教授

目次

要旨 / 1

第 1 章 研究動機と考察の対象 / 1

第 2 章 異文化接触・異文化適応についての先行研究 / 1

第 1 節 異文化接触の定義 / 2

第 2 節 異文化適応・不適応の中心的な原因 / 2

第 3 節 異文化接触であるが故に発生する問題 / 3

1) 文化的適応 / 3

2) 文化変容 / 5

3) 異文化間行動 / 7

第 3 章 筆者の異文化体験の分析 / 8

第 4 章 筆者の異文化体験の分析結果 / 9

第 1 節 筆者の置かれた環境の説明 / 9

第 2 節 内容分析結果 / 15

第 3 節 分析結果に現れた感情の具体例 / 17

第 5 章 ニューカマーの支援のあり方についての考察 / 30

第 1 節 分析結果の解釈 / 30

第 2 節 ニューカマー支援のあり方についての考察 / 34

文献 / 36

要旨

本稿ではまず筆者自身の異文化体験（イギリス，9ヶ月間）を振り返り，分析した．そして筆者がマイノリティとして抱えた問題とは何だったのか，またその問題を解決していく上で支えとなったものは何だったのかを明らかにした．

その結果をもとに日本社会のマイノリティであるニューカマーが抱える問題を認識し，その解決のために有効なニューカマー支援のあり方について考察した．

第一章 研究動機と考察の対象

私は2002年4月から2000年12月まで9ヵ月間、イギリスに滞在した。憧れていたイギリスでの生活は楽しい事ばかりではなかった。イギリスという日本とは全く異なる社会で生活する中で、私は何度も問題にぶちあたりその過程で激しい精神的葛藤を味わった。

2002年12月末に帰国した私は日本での生活に再度慣れていく中でも自分自身について深く悩み、これまでの自分とこれからの自分をどうつなげていけばいいのか分からないでいた。そんな時私は、「多文化共生社会」という概念に出会う。多文化共生社会とは民族、文化、宗教、立場の違いを超えて人々が共に生きる社会のことである。そして私は多文化共生の社会づくりを目指す京都YWCA・APTという市民ボランティアグループの存在を知る。APTは滞日外国人のための電話相談サービスの提供、定住している外国人の親と子のサポート、多文化教育の実践を行っているグループである。

APTの活動に少しずつではあるが参加させていただくなかで気付いたのは、外国人が置かれている状況に共感している自分がいるということだ。それはきっと、日本で問題を抱えている外国人とイギリスで問題を抱えていた自分自身を重ねて見ているからであると思う。国によって、また個人の置かれている状況によって状況は異なると思うが、言語的、文化的マイノリティとして抱える問題に共通点があるのではないかと考えた。

そこで本稿では、まず異文化接触に関する心理学的な研究を整理し、次に、筆者自身のイギリスでの経験を振り返り、分析する。そこで自分が抱えた問題とは具体的にどのようなものであったか、またそれらの問題を乗り越えていく中で自分の支えとなったものは何だったのかを明らかにしたい。それによってニューカマーの抱える問題の認識、及びニューカマーに対する支援のあり方についての考察を深めたいと思う。

注1) 1960年代以降、国際化の中で日本に渡ってきた外国籍の人はニューカマーと呼ばれる

第2章 異文化接触・異文化適応についての先行研究

文化を異にする個人間や集団意識の接触を一般に異文化接触と呼ぶ。つまり、自分がそれまで内面化してきた文化から離れ、多文化が支配的な社会に移動し、異なった文化と相互作用を行う事を指している。文化間行動をした場合、異文化接触によりそれまで持っていた価値、思考、行動などの枠組みに揺らぎが生じ、その内面で調整が迫られる。その調整過程を異文化適応と呼ぶ。自分が生まれ成長した文化圏では、認知面、行動面、情動面が一致しているが、異文化接触により、この三つの側面にズレが生ずる。その結果、さまざまな不快感違和感だけでなく、高揚感や新奇性などを感じることもある。(佐藤2003:p49)

第1節 異文化接触の定義

異文化接触とは渡辺文夫によると「ある程度の文化化を経た人が、他の文化集団やその成員と持つ相互作用」であり、その過程で生ずる異文化適応をも含有する概念とされる。

また、異文化接触の過程の中で、相手となる文化の特徴を自らに取り込むことは、文化的同化(cultural assimilation)、異文化接触によって文化的特質が変化することは文化変容(acculturation)と呼ばれる。

第2節 異文化適応・不適応の中心的な原因

横田雅弘は異文化の適応、不適応は様々な要因が複雑に絡みあって発生しているため要素主義的な説明は不十分である、としている。しかしその中心的な原因を、3つの側面に分けて考える事は可能であるという。その三つの側面とは、

1：異文化に入った個人の属性の問題

(性格、渡航目的の明確さ、現地語能力、専門能力など)

2：受け入れ側の問題

(外国人に対する社会の見方や法制度の側面、学校、職場、地域の受け入れ体制の質など)

3：異文化接触であるがゆえに発生する問題

(母国での自分の枠組みとは異なった異文化の枠組みでみるできないために起こる相互誤解や摩擦など)

であるという。

次節では第3の点である異文化接触であるがゆえに発生する問題についての具体的研究を取り上げたい。

第3節 異文化接触であるが故に発生する問題

1) 文化的適応

異文化接触における心理学的問題は従来文化的適応(cultural adjustment)という概念で捉えてられえてきた。文化的順応(cultural adaptation)とう概念でより広い視野から考えようとする流れが近年生まれてきている。それは文化変容、同化、適応を融合し、生態学的視点も包括しようとする立場である。

後述するように文化的適応概念に対して批判はあるが、その領域内で取り上げられてきた問題を以下に整理し、示す。

(1) カルチャーショック

カルチャーショックという概念を提起したといわれる、文化人類学者オバーク(Oberg, K)によれば、カルチャーショックとは「社会的なかかわり合いに関するすべての慣れ親しんだサイン(記号)やシンボル(象徴)を失うことによる不安によって突然生まれるもの」である。

心理学者であるファーナムとボクナーはカルチャーショックについてのさまざまな研究者の取組みを紹介し、この分野の研究者が頻繁に用いる考え方として、「カルチャーショックとは、明確な心理的・物質的な報酬(rewards)が、全般的に不確実でコントロールや予測がしにくい状況におけるストレス反応である」という捉え方をしている。

カルチャーショックを、文化変容過程で経験するストレス、すなわち文化変容ストレス(acculturation stress)として捉えようとする試みもなされている。

またカルチャー・ショックを人間の成長によって肯定的なものとして見ようとする立場や、カルチャーショックの実態が、身体的衝撃、知覚的衝撃、認知的衝撃、実存的衝撃、感情的衝撃に分類できることを示した研究もある。

なお異文化から帰国した時に、自らの文化への最適応の過程で経験する様々なショックをリエントリー・ショック「re-entry shock」と言う。

(2) 短期適応と長期適応

表1 短期適応と長期適応

	短期適応	長期適応
時期	渡航後数カ月	3, 4年以上
文化的同一性	基本的には変化しない	文化的同一性の変化, 拡張を本質とする
適応過程の課題	外部環境の変化への認知的適合の問題	個人的葛藤への洞察
普遍性	普遍性が高い	個別性が高い
援助方法	レクチャー, 適応プログラムによる援助	カウンセリングによる援助

秋山 (1992)

カルチャー・ショックは、比較的短期の文化的適応の問題であり、長期にわたる文化的適応の場合は、より個人的な問題が表面化してくることを明らかにした研究がある。短期適応と長期適応には本質的な違いがあることを見出した研究である。

精神医学者である秋山剛は、在日外国人の100例近くの精神医学的治療事例に基づき、文化的適応の問題の内容が、滞在期間の長さによって、表1のように大きく異なる事を見出した。また、プリスリンは、異文化適応の問題を短期適応と長期適応区別し、それぞれが異なるさまざまなモデルで説明できる事を示している。

文化的適応の問題についての研究や現実の場面での問題への対応は短期適応と長期適応とに区別して行わなければならない、と言える。

(3) 文化的適応曲線

文化的適応過程は、「初期の適応」、「危機」、「適応の再獲得」というようなU字型のカーブを描くと言うモデルが、リスガード (Lysgard, S.) によって提起された。また、柄ホーンとガラホーン (Gullahorn, J. T., & Gullahorn, J. E.) は、異文化での適応過程と帰国後の自文化最適過程でのそれぞれ2つのU字型曲線を合わせ、その全体の適応過程を、W字型曲線としてモデル化した。

その後、多くの研究者にたちによって、これらのモデルの検討が行われたが、研究の方法論上の問題が数多く指摘され、これらのカーブの存在の確認が、充分になされていない。

(4) 文化的調節

ファーマムとボクナーによると「適応」という考え方は、次の2つの点で問題がある、という。第一に「適応」という考え方の裏には、その人の問題を社会的環境との相互作用として見るよりも、心の中の治せばうまくいくような問題と見る傾向があること。2つ目に、自分の「文化的血統」を捨てて相手側の文化を受け入れればよい、というような、文化的ショーヴィニズム（熱狂的愛国主義）が感じられる、ということである。

この問題を回避するために二人は文化的調節（cultural accommodation）という考え方を提唱しています。

2) 文化変容

最初の文化変容（acculturation）の研究は、ハースコヴィッツたちによって実施された。ハースコヴィッツらは、文化変容を「異なる文化を持った集団が、継続的に直接的に接触し、その結果その双方あるいはいずれの集団の独自の文化的パターンが変化するような結果を生ずる現象」とし、文化変動（culture change）、同化（assimilation）、伝播（diffusion）とは区別した。

グレイヴス（Graves, T. D.）は、異文化接触によって起きる個人のレベルの文化的変容を、心理的文化変容（psychological acculturation）と呼んだ。ベリー（Berry, J. W.）は、心理的文化変容を「個人が、生活を営んでいる、他の特徴を持つシステムとうまくやっていけるように、接触の度合いを変えたり、周囲の状況を変えたり、心理的な特質を変えたりするような過程」と定義した。特に心理的文化変容といわずに文化変容の概念が、個人レベルの問題を論じる場合にも使われている。

ベリーを中心として、文化変容に関して心理学的にさまざまな研究がなされてきた。図3は、彼らによる文化変容の全体像のモデルである。図2は、文化変容の種類と段階、そして文化的心理的变化の度合いの関係を図式化したものである。

シーガル（Segall, M. H.）らによれば図1の「集団（population）」とは、生態学的、文化的、社会的、制度的集団のことである。「個人」とは人物の特性や行動をさす。「集団レベル」における文化変容は、社会構造、経済基盤、政治組織における変化、また「個人レベル」の文化変容は、アイデンティティ、価値観、態度、行動における変化によって構成される。

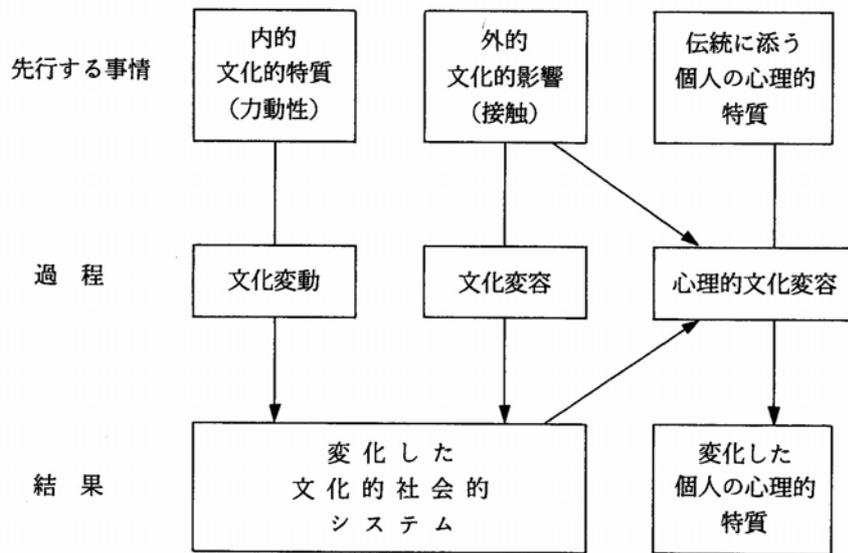


図1 文化変容研究において研究された関係性 (Segall et al., 1990)

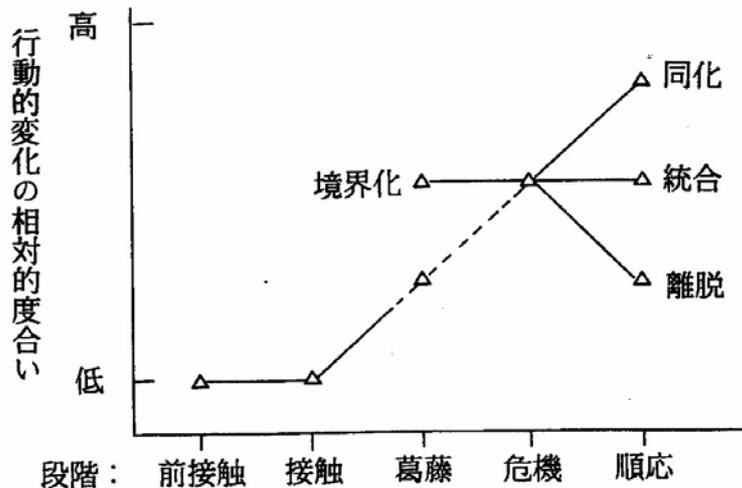


図2 文化変容の種類と段階の関数としての文化的・心理的变化の度合い

(Berry et al., 1992)

ベリーらによれば、図2の「統合 (integration)」とは、文化的アイデンティティと特徴が保たれ、かつ異文化の集団と関係が保持されている状態をさす。「同化 (assimilation)」は文化的アイデンティティと特徴は保たれていないが、異文化の集団と関係は保持されている状態である。「離脱 (separation)」とは文化的アイデンティティと特徴は保たれているが、異文化の集団と関係が保持されていない状態をいう。「境界化 (marginalization)」は、

文化的アイデンティティと特徴が保たれていなく、かつ異文化の集団と関係も保持されていない状態である。

ベリーらは、文化変容を、難民・移民・近代化など極めて実現的な問題のなかで捉えようとしている。

3) 異文化間行動

異文化接触における行動には、日常的における行動とは全く違ったいくつかの特徴が見られる。

ブリスリンらは異文化間行動の成立を、図3のモデルで説明している。

図3において、日常的な行動に比べて、特に異文化間行動の特徴とも思われる点を説明する。「知覚された役割と規範の相違」とは、さまざまな社会的な場面での自分の役割や何をしていいのかわかるのかということについての異文化における見方の違いへの気付きをいう。「自己知覚の可変性」は異文化間におけるもっとも重要な技能は他者になることであり、このような自分が他者になることによって生じる自己イメージの変化を指す。役割と規範の違いに気付き、自分の中にあるそれらを変化させ（「役割と規範における変化」）、さらに自ら持っている人柄の特性を広げる（「自己特性の拡大」）。このように自分を変化させて行った事に対して、相手からの反応（「潜在国の人たちによる強化」）を得る。

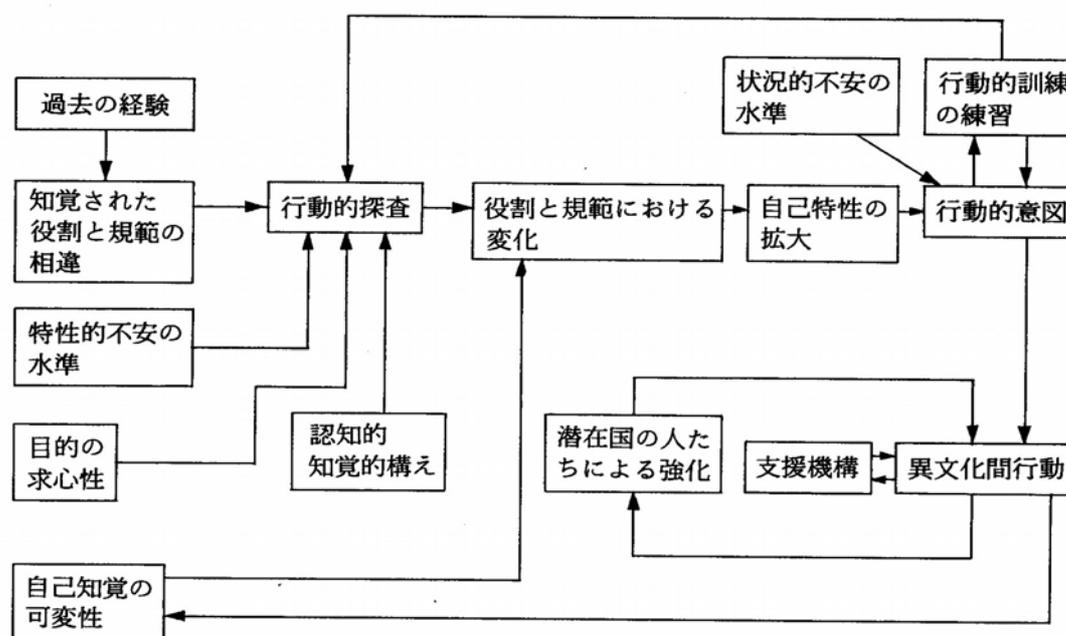


図3 異文化間行動の認知行動的図式 (Brislin et al., 1983)

異文化接触の場面は、これらの要素をうまく自己調整し、対処する事が要求される。

(渡辺 1995:p85～91，一部省略)

本章ではまず異文化の適応、不適応の中心的原因となる3つの側面として、1. 異文化に入った個人の属性の問題、2. 受け入れ側の問題、3. 異文化接触であるがゆえに発生する問題を挙げ、次にその第3の点である、異文化接触であるがゆえに発生する問題に関する先行研究をまとめた。第3章、第4章では異文化適応・不適応を左右する原因をより具体的に、第3の点を踏まえつつ、主に第1の点から捉えてみたい。その具体例としては筆者自身の経験を取り上げる。

筆者は2002年4月から12月までの9ヵ月間、イギリスに滞在した。言語的にも文化的にもマイノリティの立場として生活していく中で、実際に多くの問題にぶちあたり、激しい精神的葛藤を味わったことを記憶している。

そこで次章では筆者自身がイギリス社会に適応していく過程で経験した内面の変化を回想し、分析したい。そこで筆者がマイノリティとして抱えた問題とは具体的にどのようなものだったか、またその問題を乗り越えていく過程で何が自分の支えとなったのかについて明らかにしたい。

そしてその結果を滞日外国人支援のあり方についての考察へとつなげたい。

第3章：筆者の異文化体験の分析

<分析方法>

今回分析に使用したのは筆者自身がイギリスに滞在した2002年4月～12月を月ごとに回想して日記風にまとめ、ログにしたものである。

4月分 5月分 6月分 7月分 8月分 9月分 10月分 11月分 12月分

回想するにあたって、筆者がイギリス滞在中、家族や友人に送ったEメール等を参考にした。

1) 1次コードをつける

ラインマーカーを用いてログの中で筆者の感情に関する記述があった部分を抜き出し、そ

れを意味のかたまりごとに区切り,ナンバリングした.

2) 2次コードをつける

不必要なコードを削除,もしくはコード同士をまとめ,一般化されたカテゴリーをカードに書き写した.

3) 3次コードをつける

KJ法を用いて2次コードのグループ分けを行い,更にコードをカテゴリー化した.

4) カテゴリーとカテゴリーに含まれたログから,分割表(クロス集計)をつくった.

第4章 筆者の異文化体験の分析結果

内容分析結果を示す前に,私のイギリスでの生活の中心となった,3つの環境(活動),つまり,1.公立学校で行ったスクールインターン,2,ホームステイ,3夜間の英語のクラスに関する基本的な情報,及び分析結果を読み取るに当たって必要と思われる情報を記述しておきたい.

第1節:筆者の置かれた環境の説明

1.公立学校で行ったスクールインターンに関して

<スクールインターンとは>

私は2004年4月から2004年12月まで,ある海外インターンシップ斡旋団体が提供するスクールインターンというプログラムに参加した.スクールインターンとは欧米などの幼,小,中,高,高校やコミュニティで日本の文化や日本語を紹介する代わりに現地の実生活に慣れ,言葉とライフスタイルを体得するという「ギブアンドテイク」のプログラムである.

<インターン先と待遇>

私に紹介されたインターン先はハイスクール(High School,13歳~15歳)とランゲージカレッジ(Language College,16歳~17歳)が一つになった公立学校であった.ランゲージカレッジという名が付くだけあって,語学教育には力を入れていていた.フランス語,ドイツ語,スペイン語に加えて,イタリア語,ロシア語,日本語の授業まで行っていた.フ

フランス語,ドイツ語, スペイン語に関しては, 各言語のネイティブの学生を毎年語学アシスタントとして有給で雇っていた. 一方, 私のインターン活動は無給で行われた(交通費と昼食は支給.)彼ら語学アシスタントと私はそれぞれ異なるプログラムから派遣されており契約条件は全く異なっていた.

<具体的な活動内容と時間割>

具体的な活動内容と時間割は実際に活動を始めるまで決められていなかった. そして現地到着後, 学校側(ホストティチャ)と私の話し合いの中で決められていった.

ただ基本的には月曜から金曜, 毎日学校に行く事になっていた.

活動内容の推移

4月上旬~中旬

ロンドンにて3週間, 他のインターン生と共に研修を受ける. イギリスの教育制度, 折り紙の教え方(英語を使って), 模擬授業などその内容は多岐にわたった.

4月下旬~5月

カレッジで日本語の授業のアシスタントをする.(週2日, 4コマ)それ以外の時間で英語, 他の外国語, 地理, ドラマ, 美術, 数学など様々なクラスの見学を行う. 料理のクラスに関しては3度目以降, 生徒として参加させてもらう. サッカーのワールドカップに合わせてディスプレイを作る.

6月

カレッジで日本語の授業のアシスタントをする.(週2日, 4コマ)見学の時間を少し減らしてもらい, 7月に行われる Japanese Week(14歳の生徒が一週間全ての授業において日本について学ぶ学校イベント. 例えば外国語の授業では日本語, 料理の授業では日本語など. 学年を半分に分けて順番に行うので実質2週間行われる.)に向けての準備を行う. 具体的には日本に関するクイズ作り, 折り紙の本の一部を生徒用に英訳, 俳句に関するディスプレイ作りなど.

7月

Japanese Week 期間. 日本語の授業を先生として行う. また日本料理, クイズ, 地震, 俳

句、折り紙などのクラスを順に周り、アシスタントとして手伝う。

9月以降の活動に関してインターン先の近所のミドルスクール Middle School(9歳～12歳)でも活動してみたいという意志をホストティチャに伝える。

8月(夏休み)

9月上旬

カレッジで日本語のクラスのアシスタントを行う。(週2日、4コマ)

学校側は過去において Japanese Week のために約3ヶ月(4月～7月)インターンを受け入れた経験しかなく、9ヶ月という長期の受け入れは私が初めてだった。また OFSTED(学校の質を調査し、格付けする国家機関)が9月末に来ると言うことで先生方はその準備に忙しかった。よって春は私の見学を歓迎してくれていた先生方も、OFSTED が終わるまでは第三者をクラスに呼ぶ余裕が無いとあって私を受け入れてはくれなかった。新学期に向けて意欲に満ちていた私はこの状態にひどく落ち込んだ。そして、この状況に対する不満をホストティチャに直接伝えた。

9月中旬

ミドルスクールで活動できる事が決定する。毎週月曜と木曜はミドルスクールに通う事になる。(週2日、9コマ)

カレッジでの日本語教師 T さん(日本人女性、英国在住)に T さんが学校にいないときも生徒の会話の相手など、できることがあればなんでもお手伝いさせてくれるよう申し出る。

カレッジの日本語のクラス(1クラス週2コマづつ)には、週1コマしか来ることができない生徒が多く存在した。そのため授業の進め方が難しく T さんは困っていた。生徒全員が週2コマ授業を受けることができる状態にするため、T さんの日本語クラスの他に私の日本語補習クラス(T さんの授業内容と全く同じ)の時間を作ってもらった。

9月下旬～10月

カレッジ（火曜，水曜） -

日本語教師Tさんのアシスタントをする(週3コマ) .

日本語補習クラスを行う（週4コマ）

遅れて授業に参加し始めた子達の為の補習授業も行っているので11月以降より1コマ多い

ミドルスクール（月曜，木曜）

クラスから少人数グループを教室の外に出し，日本語の挨拶，折り紙，クイズなどを行う .

（週9コマ）

ホストティチャ の了承を得て，金曜は休日

10月末

ハイスクールの地理の先生から11月以降地震について勉強するので（阪神大震災についても触れるので）来て欲しいと頼まれる .

ミドルスクールの生徒からの要望によりお昼休みに日本語のクラブをする事になる .

11月～12月

カレッジ・ハイスクール（火曜，水曜，金曜）

日本語教師Tさんのアシスタントをする(週3コマ) .

日本語補習クラスを行う（週3コマ）

地理の授業のアシスタントをする（週3コマ）

ミドルスクール（月曜，木曜）

クラスから少人数グループを教室の外に出し，漢字，日本の生活の紹介（写真を使って）

などを行う（週コマ8コマ）

お昼休みに日本語のクラブを行う . 簡単な日本語会話，折り紙，クリスマスカード作りなど（週一回）

2.ホームステイ先に関して

<ホームステイ先 ロンドン 3週間 >

ホストマザー，ホストファザーの二人暮らし．たまに息子達が顔を見せに来る．
ビジネスと割り切って学生を受け入れているという印象．
あまり干渉されず，夕飯も別にとることが多かった

<ホームステイ先 インターン先の近く 8ヶ月 >

ホストマザー，ホストファザー，ホストブラザー，ホストブラザーの友人．
常に海外からの学生を数人受け入れている．
非常に田舎と言う事もあって生活にはファミリーの協力が不可欠（バスが少ないため送り迎えなど）ホストマザーは学生に対する関心が強く，良く世話をしてくれる．
別居中の息子夫婦，娘家族，近所の人達など人の出入りが非常に多い．

私のインターン先，ハイスクール・ランゲージカレッジとのつながりが深く，そこで働く語学アシスタント（通常 4，5人）のうち，3人は最初この家に滞在することになっている．（一ヶ月して上手く馴染めなければ別の場所に移ることが可能）

ファミリー での外国人学生受け入れの推移（私の滞在期間中）

4月～：ハイスクール・カレッジのフランス語アシスタントT（男性），スペイン語アシスタントS（女性）（200110月から滞在）

5月中旬：インド洋に浮かぶ島 Reunion（フランス領）の女の子（一週間）

5月末：フランス語アシスタントT，スペイン語アシスタントSが帰国

6月末～：ドイツ人N（女性，ボランティア，ホームステイが目的）

7月中旬：アメリカ人グループ（一週間）

8月上旬：ドイツ人N帰国

8月下旬：日本人M（女性，ホームステイが目的，一週間）

8月下旬～：ハイスクール・カレッジのドイツ語アシスタントC（女性）

9月下旬～：ハイスクール・カレッジのスペイン語アシスタントM（女性），フランス語

アシスタント G (男性)

10月中旬：ドイツ語アシスタント C，スペイン語アシスタント M，フランス人アシスタント G が都市部に学生アパートに住むため引っ越す

12月～：ハイスクール・カレッジのドイツ語新任教師 A (女性)

上記以外にも近所の私立学校で寮生活をしている香港人の男の子 O が，学校が短期間の休みに入る時（一週間程度）は毎回，この家に滞在しに来ていた．また週末も度々遊びに来ていた．

10月中旬にそれまで一緒に滞在していた語学アシスタント C，M，G が引っ越してしまう．実は当初私も彼らと一緒に引っ越す事を考えた．ちょうどホストマザーとの関係においてストレスを抱えていた時期であったのと，語学アシスタント達との間に強い仲間意識が芽生えていたことが大きな理由である．しかし，いざ引っ越すという話になった時，ホストファミリーと私達外国人学生グループの関係に大きな溝が出来てしまった．長期間この家に滞在してきた私はその冷え冷えとした空気に絶えられなかった．私がどうするべきか分からず悩んでいた時にホストマザーが私の話を聞きに来てくれた．そのことがきっかけで私はファミリー側と話をすることとなった．そして最終的に一人この家に滞在しつづけることを決意した．ホストファミリーと語学アシスタント達はその後もお互い敵意を持ち続けた．このような状況の中で私と語学アシスタント達との関係も次第にぎくしゃくしたものとなって行く．この過程において私は非常に大きなストレスと精神的な葛藤を味わった．

3.夜間の英語のクラスに関して

私は5月～6月上旬，また9月～12月中旬の間，都市部にあるカレッジで夜間の英語コースに通っていた．

< 5月～6月上旬 >

ケンブリッジ英検の Proficiency 対策コースに週1回（3時間）通う．

同居人のフランス語アシスタント I が通っていた事から一緒に行くようになったのだが，授業のレベルが高すぎてついていけなかった（一つ下のレベルのコースはすでに定員に達していたので入れなかった．）

< 9月～12月中旬 >

ケンブリッジ英検の Advanced 対策コースに週 2 回（2 時間ずつ、計 4 時間）通う。
Proficiency より一つ下のコースに通う。授業のレベルは自分に合っていた

第 2 節 内容分析結果

表：カテゴリーとログのクロス集計（グループ別）

イギリス滞在中に生じた筆者自身の感情

イギリス社会及びイギリスでの人間関係について

I（喜び, 好奇心 etc）

A 新しい知識, 珍しい光景に対する驚き、感動	4	1		1
B 多文化が共存している状況に惹かれる	2	1	1	
C イギリスと日本を比較(イギリス側に憧れる) 極力日本語, 日本のものを避ける		3		
D (イギリスでの生活に集中したい)	1	3		1
E イギリス人以外の友達に対する仲間意識、安心感	5		1	1
F イギリスの生活に慣れたと感じる		1	1	
G ホストファミリーとの距離が縮まったと感じる		2	1	3
H 生徒との距離が縮まったと感じる				1
I 自分(日本)に興味を示してくれるのがうれしい	1	1		1
J 自分に対して好意を持ってもらいたい	1	1		1

イギリス社会及びイギリスでの人間関係について

(不安, 不快 etc)

K 予期せぬ出来事, 状況に対する困惑、不安	1	3		5	3
L 自分に対する厳しい物の言い方, 態度にショックを受ける	1			3	3
M イギリス人の特徴を批判的に捉える, イギリス人に対する不満		2		2	1
N ホストファミリーとの関係に危機感を感じる				2	3
O 以前した親しかった友人達(外国人学生)との関係に疲れる					2

P	これから先イギリスで上手くやっていけるかが不安	1			
Q	一人でいる時間が気楽, 落ち着く	3		2	1
R	ストレスのたまる環境から逃げ出したい			1	1 1
S	日本人や日本語, 日本の物が恋しい			1	4
T	帰国後に対する不安			1	1

英語力に関して

U	英語力が不十分な事による劣等感、ストレス	3	11		
V	英語が通じた, 上達した事に対する喜び	4		1 3 2	1 3
W	英語を通して色々な国の人を理解できることに対する喜び	1	1	1	

自分自身との対話 (積極的な感情)

X	前向きでいようと努力する	1		4	1
Y	自分がイギリスに来た目的を改めて確認する 自分の意見, 意志をはっきり伝えたい		2	1	1
Z	(伝えられる自分になりたい)	2	1	4	9
a	自分自身で考え, 判断し, 行動できるようになりたい			1	5
b	自分の行動を反省し改めようとする、自分の行動に責任を感じる			3	3 1

自分自身との対話 (消極的な感情)

c	自分に自信が無くなる, 後ろ向きになる			2	
d	相手が自分に期待する行動をとろうとする	1	2	3	
e	その場の雰囲気流される, 他人の言動に左右される			8	
f	自分ひとりの行動では無いという甘え, 安心			1	1
g	自分の不満やストレスを相手に気付かれたくない, 言いたくない	1	4	3	2 2

誰かに嫌がられることをしたくない, 言いたくない,					
<i>h</i> (中立の立場でいたい)	3	1	12	3	1
<i>l</i> 自分の気持ち, 考えが整理できない, どう行動するべきかわからない			4	1	
<i>j</i> 反論できない, 不満が言えない	1	3	3	2	1

他者を必要とする自分

<i>k</i> 誰にも相談できない					3
<i>l</i> 誰かに相談したくてたまらない					3
<i>m</i> 自分を理解し支えてくれる存在があり難い			2	3	3 3
<i>n</i> 冷静で客観的な意見がありがたい				2	
<i>o</i> 共感される, 認められることによって気持ちが楽になる					3 2
<i>p</i> 自分の気持ちをわかってもらいたい			1	4	1
<i>q</i> 子供達の前に立つことによって自分が支えられている					1

他者に必要とされたい自分

<i>r</i> 自分は役に立っている, 認められていると感じる喜び	2	1	2	2	5 1
<i>s</i> 自分は必要とされていないと感じる辛さ	1		3		

第3節 分析結果に現れた感情の具体例 (カテゴリーに含まれたログの具体例)

・イギリス社会, イギリスでの人間関係について (喜び, 好奇心 etc)

A. 新しい知識, 珍しい光景に対する驚き, 感動

1 4) ロンドンには歩いてると次々と壮大な建物に遭遇する。また大都市であるにも関わらず、ハイドパークなど広い公園が街の中にもいくつもあって、昼休みに公園でランチをとる人々が大勢いる。なんて余裕があるのだろう。

1 6) 日本とイギリスの教育制度がかなり違う事に私はとても驚いた。今まで知りえなかった事がどんどん知識として増えていくのが楽しかった。

6 4) ある日インド洋にある小さな島から黒人の女の子がホームステイをしにやってきた。その島はフランスの植民地

だから彼女はフランス人で、もちろんフランス語を話す。私は純粋に驚いた。

B．多民族・多文化が共存している状況に惹かれる

15) 一番のお気に入りの場所はトラファルガースクエアだ。そこにはいつも白人、アジア人、黒人色んな人種が集まってくつろいだり騒いだりしていた。私はその光景を見ながら自分がその一員としてこの場所にいる事をとても誇らしく感じていた。またバスなどに乗っていて気付いたことは誰も私が日本人であることに気をとめないということだ。皆見慣れているのだろう。私はその感覚がとても心地よかった。私は自分がどうあるべきかなんて気にすることは全く必要なかった。私はただ素の自分でいれば良かった。

20) 英国では一つのクラス内で別の内容の授業をすることは普通らしい。国語(英語)の授業だと、アルファベットを書くのがやっとという子もいれば、文章をすらすら書けちゃう子もいる。だからそれぞれにあったレベルの授業をするのだとか。「えっ、そんなレベルをつけちゃっていいんですか? 日本だといじめが起きそう」と聞いてみた。すると先生は「子供達はあんまり気にしてないですよ。国語(英語)が得意な子もいれば、数学が得意な子もいるし。英国は上流階級と中流階級、労働者階級とクラスが存在する。差別があるのは確かだけれども、皆あまり卑屈にはならないのね。皆それぞれハッピーと言う感じ」私は先生の話聞きながら興奮していた。なんて魅力的な社会なのだろう。私はきっとこの英国の多様さに惹かれているのだ。ここでは皆、人間は一人一人違うという事をちゃんとわかっているのだ。なんて素敵なんだろう。

C．イギリスと日本を比較(イギリス側に憧れる)

61) 私は、自分の両親の関係と、ホストファザー、ホストマザーの関係があまりに違うのに驚いた。うちの両親の関係は典型的な亭主閑白だった。母親は仕事と家事でいつも忙しかった。そして母親は父親をとにかくたてた。一方ホストファザーとホストマザーの関係は対等だった。ホストマザーは自分の時間を思い切り楽しんでいた。また、ホストファザーは自分の飲み物は自分で作る。後片づけを手伝う。食事後は毎回「おいしかった。本当にありがとう」というなどした。亭主閑白も一種も役割分担だとは思いますが私はホストファザーとホストマザーの関係に憧れていた。

63) 普段「It's up to you.」「It's your choice.」といった言葉が良く耳についた。日本ではここまで頻繁に自分の意見を求められることも無かったように思う。こういった言葉を聞くたびに日本との根本的な考え方の違いを感じた。日本にいた時私は周りとの調和を常に意識していたように思う。自分の行動は常に周りの人の行動によって大きく左右される。周りの人がどう思うかがとても気になる。イギリスにいると自分がどうしたいのかが行動の基準のように感じる。周りの人はそれを尊重する。その分、しっかり意見を言うことが求められる。こうした違いを発見する度、私は興奮した。そして自分も意見をはっきり言えるようになりたいと思い。そうするよう心がけていた。

D . 極力日本人や日本語 , 日本の物を避ける (イギリスでの生活に集中したい)

75) 私は、自分をできるだけイギリスでの生活、人間関係に集中させようとしていた。そして日本とのつながりを極力少なくしていった。ロンドンでの研修で出会ったインターン仲間とも会う事は無かった。日本語が話せる友人をイギリスで作ってしまうと、私はどうしても日本語を話してしまうだろうと思ったからだ。

76) 私は過去の (特に大学での) 人間関係においていつも自分を理解し、受け入れてくれる存在を求めているように思う。そういった存在はとても有難く自分にとって大切だった。しかし一方でそうした存在に甘えている自分にも気づくことが多かった。そうした人達に受け入れてもらえているという安心感から何かしがむしゃらに努力をするということをしなくなっていた。私はそうした日本の友人には極力頼らず、一度ゼロになって自分の可能性に挑戦したい、そのようなことを考えるようになっていった。そしてイギリスの人間関係にうまく適応すること、インターンを成功させることに全力を注ごうとした。私は、できるだけ変わりたい。そう思っていたのだ。

E . イギリス人以外の友達に対する仲間意識 , 安心感

41) 実際私は (イギリスの中での) 外国人といるととても落ち着いた。つたない英語でもやさしく聞いてくれるという安心感があったし、イギリスで暮らしていて不思議に思うことなどを話せる相手だった。

43) 授業が無く、職員室に一人で居るときは周りの目が気になった、しかし話しかける勇気も無かった。同居人であるフランス人、スペイン人の語学アシスタントが職員室に来ると私はとてもほっとした。

45) イギリスにおいて私達外国人は仲間だった。フランス語アシスタント T は良く「We are on the same boat」という表現を使った。

F . イギリスでの生活に慣れたと感じる

71) 私はこの頃イギリスでの生活に少しずつ慣れてきていた。いつも新しいものに触れ、自分が成長して行っているような気分だった。

G . ホストファミリーとの距離が縮まったと感じる

70) 私は大分ファミリーになれてきた。ホストブラザー達とも大分親しくなって、彼らは私をいじるようになっていった。電話に出るとき、だれかわからないのにわざと「もしもし」と言ったり、私を酒飲みだ、朝寝坊だと言ってからかったり。そして私の反応を見て喜んでいるようだった。私は彼らのそうした態度にとっても助けられていた。

79) 私はホリデーと一緒にいかないかと言ってもらえてとてもうれしかった。きっと私のことをファミリーの一員として見てくれているからこそ、言ってくれたのだと思った。

82) ホストブラザーやホストブラザーの友人 (同居人) からも自分が友人として扱われている自覚があった。特にホ

ストブラザーはホストマザーが私に厳しい言い方をすると、それに対して「何で晴子にそういう言い方をするのか？」とかばってくれる事が多かった。私はホストブラザーやその友人（同居人）にからかわれることによって自分が好かれているという事を確認し、ファミリー内での居場所を感じていたのだと思う。

H. 生徒との距離が縮まったと感じる

172) 少人数で授業を行うため、生徒たちとの距離は近くなっていった。授業の中で集中力が切れて来た時や、街中でばったり会った時など、よくおしゃべりしたりした。家の中でホストブラザーと話しているおかげで、若者が話す英語もだいたい聞き取れるようになっていた。

I. 自分（日本）に興味を示してくれるのがうれしい

19) 研修の締めくくりとして、二人ペアでロンドンの小学校で授業をした。地理や日本に関するクイズ、習字、折り紙などをした。クラスの子供はほとんどが黒人の子供達だった。すごく緊張したが彼らが興味を持って楽しんでくれていた姿を見て楽しかった。日本のことを伝えてその反応が20数人の子供からダイレクトに返って来るのは感動的だった。

106) 食堂へと移る時、廊下で生徒が次々と私の名前は何か、日本語で Hello は何と言うのかなどを聞いてきた。私が質問に答えると皆それをずっと言いつづけた。そして更に Thank you はどういうの？といった質問を次々としてきた。先生がハルコは来週から3ヶ月間この学校に来てくれるから、また教室で聞きなさいというと皆興奮気味に本当？ やったー！と言った声を挙げた。私は生徒達の好奇心の強さにとても驚いた。High School では一部の生徒にしか関心を示されないという状況だったので私は本当に嬉しかった。

J. 自分に対して好意を持ってもらいたい

11) なんとかうまくやろうとした。頑張ったかいがあったのか彼女は私を気に入ってくれていたように思う。最終日彼女は「次の日本人もあなたと同じくらい良かったらいいのだけど」と言った。私はかなり嬉しかった。

23) 私はホストティーチャーにできるだけ好印象を持ってもらえるよう、がんばって話した。

86) この頃ホストマザーは私によく帰国後どうするのか、このままイギリスに居てはどうかとよく言った。私はそうしてもらえること自体は嬉しかった。その言葉から自分がイギリスで何とかやっていけると思われている、ホストマザーが自分にある程度は好意を持ってきているという風を感じたからだ。

. イギリス社会、イギリスでの人間関係について（不安、不快 etc）

K. 予期せぬ出来事，状況に対する困惑，不安

27) カレッジでの英語のクラスへの申し込みを済まして数日後、スペイン語アシスタント(同居人)Sにそのクラスのレベルはかなり高いという事実を聞かされた。Sは途中でそのクラスをギブアップしたらしい。Sは私より英語力がかなり高い。私は少し不安になった。そして(私は途中からの参加だったので、)コース終了までの約1ヶ月半、私は毎週とんでもない苦痛をそこで味わう事になった。

97) 私は相当に混乱した。今まで数ヶ月間行きたいとってアレンジされなかったのに、少し私が強い口調で主張するとその日の内にアレンジされてしまう。なんなのだ、それは、と言う気持ちだった。今まですごく悩んでいた自分は何だったのだ、と。

134) ランチを食べようとしていた私は、ドイツ語アシスタントC(同居人)とホストティーチャーIが激しい口論をしていたということを他のアシスタントから聞いた。何が起きたのかかと思っていると、Cがやってきた。そして彼氏が滞在する期間、授業時間を調整したいと頼んだ時、Iと言い合いになり、その勢いで今まで自分が不満に思っていた事を全て話したと言った。つまり、彼氏がやって来るというのに私達の滞在している家には泊まらせることができない不満や、その事についてホストマザーが直接自分に言ってくるのではなく、Iを通して言って来たことに対する不満などだ。私は、これは大変なことになるぞと思った。私もCと一緒にその事について話してきたが、まさかCがそれを全て相手に伝えるとは驚きだった。CはIがPに報告する前に自分の口からPに話さなければ、と言った。

L. 自分に対する厳しい物の言い方，態度にショックを受ける，反感を覚える

1) 私がロンドンでのホームステイ先に到着した日、ホストマザーはパジャマで私を出迎えた。私は彼女が眠そうにしていたので「何時に起きたのですか」と聞いた。私は時刻を聞いたら私のために早起きさせてごめんなさいね、とでも言おうと思っていた。すると「今よ。あなたのためにね。」との不機嫌な言葉が返ってきた。私はかなり面食らってすぐ謝った。

113) 私はホストマザーPが自分に対して、イライラしているな、とか今嫌味を言ったな、と言う時、それをひどく気にした。私はもともと気にしすぎな性格ということもある。日本においても過去の人間関係において相手に悪い感情を持たれないように自分の言動をひどく気にしていたように思う。日本人は割と自分の感情を表に出さない事が多いように思うがPは違った。

131) その日の夕飯の席でホストマザーPは、また私が以前した行い(Pが気に入らなかった)を誇張して話した。はっきり言って私はもうその話題にうんざりしていた。ドイツ語アシスタントC(同居人)がかばってくれた。それは真実ではないと。だがPの嫌味はそれでは終わらなかった。Pは、会話の中で私の名が出てきた時、晴子は今いる学生達を引っ張っていくべきだ。晴子はそれだけここに長くいるのだから。とかなり刺を含んだ口調で言った。しかもこういった嫌味を言う時Pは絶対に私の目を見ないのだ。私はかなりストレスを感じていた。Pは私にどうしてほしいと言

うのだ。

M．イギリス人の特徴を批判的に捉える，イギリス人に対する不満

67) オーストリア人のドイツ語アシスタントLが帰国する直前，私は良く彼女と遊びに出かけた．彼女とは不思議と深い話しが出来た．イギリス人の特徴についても良く話した．イギリス人は仲良くなるまでは当たり障りの無い話しかしない．一見すごくフレンドリーに見えて実はあまり心を開いていないような気がする．など．

116) 私はホストマザーPの気持ちがよく分からなかった．Pは，言いたい事をとても遠まわしに言うように感じていた．イギリス人全体に対してそう言えるのかも知れない．ドイツ語アシスタントC(同居人)とはかなり物事を直接的に話す事が出来た．私はCを信頼していた．

N．ホストファミリーとの関係に危機感を感じる

119) 私は文化が違う人が集まって同じ屋根の下に暮らすことを改めて難しく思っていた．

139) それからというものの家の中にはかなり不自然な空気が流れていた．ホストブラザー達は私達に話し掛けないどころか，同じ食卓でご飯を食べようとさえしなかった．

O．以前した親しかった友人達(外国人学生)との関係に疲れる

163) 実際彼らといってもそんなに楽しくなくなっていた．週末彼らの家に行ったとしても彼らはあまり私の事を気にせず，私の知らない話題で盛り上がるが多かったし．またホストファミリーの様子を私にいつも聞いて来た．そして私が答えたあとの反応はとても微妙だった．また彼らの家に行ったことを帰宅してホストマザーPに話すとPは露骨に嫌な顔をするのであった．そんな状況の中で私は彼らと関わるのが面倒になっていった．

164) ホストマザーPは別の家に一人でホームステイしているフランス語アシスタントSと私を仲良くさせたがった．PはSをディナーに招待したり，私を映画に連れ出すときはSも誘ってみてはどうかと良く私に声をかけるようになった．PがSをディナーなどに招待していることを知ったアシスタント達(家を引っ越したグループ)は，「それみたことか．Pは私達が嫌いなのだ．」といった発言をした．私は疲れていた．

P．これから先イギリスで上手くやっていけるかが不安

54) 私はこうしたフランス語アシスタントT(同居人)やS(同居人)の反応を見るうちに私はこれから長い間滞在して上手くやっていけるのか少し不安になった．

Q．一人でいる時間が気楽，落ち着く

12) ロンドンのホストマザーは私にどこどこへ行ったら? という風に勧めることはあっても基本的に一緒に行動する事は無かった。私はそれはそれで気楽だった。ロンドンには以前旅行で訪れた事もあったので週末は一人、又はインターン仲間と観光をした。私は一人でバスに乗ったり、街を歩いたり、公園でボーっとする時間が好きだった。

16) 確かに私はあまり乗り気ではないのだ。ただ一緒に行ったほうが他の学生たちとの関係がやりやすくなるだろうと思ったのだ。私は自分でも訳がわからなかった。ただこんなに色々面倒くさい思いをしている以上、一人で動いた方が楽だと思っていた。

R. ストレスのたまる環境から逃げ出したい

95) この日は春からずっとためていた感情が爆発したという感じだった。私はその日、ホステイチャーIの許しをもらって昼のバスで帰宅した。帰りながらも私は気分が悪かった。初めて日本に帰りたような気分になっていた。それまでそんなことは考えもしなかったのにこの時はそう思った。

87) 週末はどんどん出かけるようにしていた。学校、家、カレッジを往復し、複雑な人間関係の中にある自分の環境から逃げ出したいという気持ちもあったように思う。私は本当に疲れていた。

S. 日本人や日本語、日本の物が恋しい

70) この旅行は私にとってつかの間の休息といった感じだった。私はそれまで日本語や日本のものを極力避けようとしていた。だがこの旅行では宿泊先で日本人を見つけると自分から声をかけた。そして行動を共にした。

88) 私はロンドンの三越やジャパンセンター、などにも行ってみた。そこはロンドンと思えないくらい日本人で埋め尽くされていた。私はその空間にとても違和感を覚えていた。こんなにたくさんの日本人を見るのは何ヶ月ぶりなのだろう。私は自分がかかなりイギリスの生活に染まってきているのを感じた。他にもユニクロやGAPなどを回って買い物をした。その日の夜、ユースホステルでとても話の合う日本人と出会い、夜中まで話した。私はきっと日本が恋しくてたまらなかったのだと思う。この週末それを痛感した。

90) この頃私は先月に続いて日本の友達にメールをする回数が増えていた。イギリスに来てから一度も連絡をしたことがなかった友人にメールしたりもした。

T. 帰国後に対する不安

212) 私は帰国直前、ホストマザーに日本に帰ってからどうなるのかちょっと心配だ、もうイギリスに9ヶ月間いて、日本に帰ったら自分が日本の生活をどう感じるのか想像がつかない、と話した。

．英語力に関して

U．英語力が不十分な事による劣等感，ストレス

5)私は言葉がおぼつかない事もあってとても気を使った .何か言いたい事があるときは辞書を調べ言いたいことを頭の中でリピートしてから言うという感じだった .

28) 授業の大半は議論やグループワークなどによって行われた . 私は全くついていく事が出来ず , 呆然としながらどうか私をあてないでくれと祈るばかりだった . どうやら私の顔はかなり不安げで強張っていたらしく , インターン先の High School のフランス語アシスタント V は私に「大丈夫?このクラスから何が学べそう?」と気を利かせて聞いてくれたほどだ . 3時間のクラスの間一度だけ休憩がある . 皆カフェテリアに行っておしゃべりをするのだが , 周りの皆と自分の英語のレベルに差がありすぎて話すことができない . 私はいつも隅っこの方に座ってニコニコしていることしか出来なかった .

38)インターン先の High School はお行儀が悪い生徒が多かった . 私が理解できないということをわかっていて私に無礼な言葉(スラング)をかけてきたりした . 周りは笑っているので私は自分がバカにされているのだということは理解できた .

V．英語が通じた，上達した事に対する喜び

21) 去年のヨーロッパ旅行で出会ったイギリス人二人組と再会した . 去年に比べてたくさんの事を話す事が出来た . 英語が少し上達することによって彼らを前より多く知ることができるようになっていたことが本当に嬉しかった .

205) 春は英語のクラス (Proficiency) でほとんど口を開かずどこかおびえたような態度をとっていたが夏休みを過ぎ , Advanced クラスに来てからは積極的に発言をするようになっていた . そんな私の変化を先生はとても誉めてくれた . 英語の上達について褒められるのは本当に嬉しい . 私は帰国まであと少しの間だががんばって英語力に磨きをかけたいと思っていた .

W．英語を通して色々な国の人を理解できることに対する喜び

68) イスラム教徒で日本に滞在経験があるスリランカ系のイギリス人と話す機会があった . その人とはかなり打ち解けることができた . 私は彼と出会って , 大学二年の時にマレーシアで感じた感動を思い出していた . 私はマレーシアへのスタディーツアーに行ったのが初めての海外経験だった . そこで肌の色や宗教は違っても , 友達になろう , という気持ちがあればなれるのだ , と純粋に感動したのだった .

IV．自分自身との対話① (積極的な感情)

X．前向きでいようと努力する

1 0 2) 私は今まで「Middle School でも活動ができればいいなと思っている」と言っていたが、自分がどれだけ意欲があるのか、そこで何がしたいのか明確に伝えてはいなかったのではないかと、思った。どこかホストティーチャーから指示されるのを待っていた部分があったのだと思う。きっとこの国ではちゃんと意見を伝えないと何も進まないのだ。そう思った。私はホストマザーのアドバイスを頭の中で繰り返しながら、前向きな気持ちになっていた。

1 2 2) 楽観主義的に生活しよう、いつも笑顔を心がけよう、注意されてもあまり個人的にとらえずに次から気をつけるようにしよう。私は異国の地という不安定な状況だからこそ、いつも周りの人の意向を伺って、面倒なことにならないよう心がけていたような気がするけど心配しすぎて逆効果になることもあったのだ。何より自分が幸せでいつづけることがとても大事なのだ。そうすれば周りとの係わり合いも上手く行くはずだ。

Y . 自分がイギリスに来た目的を改めて確認する

7 3) 私はこのイギリスでのインターンを自分にとって大きなチャレンジに捉えていた。

1 7 9) 私はこの頃、自分はここにインターンをしに来たのだ。一番大切なのはこのインターン活動(授業)と英語の勉強なのだ、と人間関係にストレスを感じている自分に言い聞かせるようにしていた

Z . 自分の意見、意志をはっきり伝えたい(伝えられる自分になりたい)

4 5) イギリス人の先生がスペイン語アシスタントと言葉を交わした際に、「Speak Properly(きちんと話さない)」と言った事があった。そのうわさは一瞬にして語学アシスタント中に広まった。それまで好印象な人ととられていたその先生はすぐ私達の中で悪者扱いとなった。「あの人は外国人の気持ちを全く理解しない。外国人がネイティブと同じだけ話せるはずがない。自分はスペイン語をちゃんと話せるのですか?と聞いてやればよかったのだ。」とあるアシスタントが言ったものだ。全くその通りだと納得した。同時に厳しいことを言われるとただ傷ついているだけだった私はその意見に励まされる思いがした。自分も彼らのように自分の意見をしっかりと言えるようになりたいと思った。

9 2) 私はその日朝から5時間何もしていなかった。私はホストティーチャーIのところに行き「今日はもう帰って良いですか?朝から五時間何もせずにただ歩き回っている状態で気分が悪い。私は学校の為に何かできるのであれば喜んでくれるけれど、何もすることがないのであれば家に居る方が良い」と。これは私にとってとても劇的なことだった。私はそれまでホストティーチャーにもホストマザーにも不満というものをつも言ったことが無かったのだ。

1 5 0) 私はとにかく、自分が今まで何を考え、なぜ最近のような行動をとったのが自分の口から説明したいと思った。

a . 自分自身で考え、判断し、行動できるようになりたい

1 5 7) 私は他人に影響を受けやすい人間だ。それは日本でも親しい友人に何度も指摘されていた点だ。だが今回の騒動で改めてそれを思い知らされた。他の人に流されるのではなく、行動に出る前に冷静になって私自身にとって何が

事なのか、どうするのが一番いいのか自分自身の価値観で考えなければいけない、と思った。

b. 自分の行動を反省し改めようとする、自分の行動に責任を感じる

120) 家族のように皆で暮らしていくのだから、気を使ってばかりでもアンフレンドリーだと思われるだろう。でも結局は他人なのだ。両親の家とは違って、互いに気を使わないといけない。好き勝手言う事は許されない。お互いを受け入れる努力をしないとけない。ある程度のことは我慢する寛容さがないとけない。私は長い間ホストファミリーと暮らしていく中でどこかある程度の事は許される、というような甘えた部分があったのかもしれない。

147) 引越しの日まで一週間の間に私はどうやってホストファミリーにさようならを言えばいいのか。今まで嫌な事もあったが全体的には楽しく滞在させてもらっていた。だが私は彼らにどうやって感謝の気持ちを示したらいいのか。こんなぎこちない状況でさようならを言う事になればこの5ヶ月間の滞在を台無しにしてしまうのではないかと。

・自分自身との対話 (消極的な感情)

c. 自分に自信が無くなる、後ろ向きになる

100) 「私は自信を完全に失っていた。そしてネガティブになっていたのかもしれない」と話した。

d. 相手が自分に期待する行動をとろうとする

10) 私はすごい集中力でホストマザーの意向を汲み取ろうとしていた。

52) 私は英語が少しずつ聞き取れるようになるにつれ、そういった周りの人物の心情を言葉から読み取ろうとするようになっていった。

93) 常に自分がどう行動するのが期待されているのかを考えて行動してきたのだ。

e. その場の雰囲気流される、他人の言動に左右される

136) ドイツ語アシスタントC(同居人)は「私はもうこの家に入れないわ。昨日からとてもぎくしゃくして本当に気分が悪い。私はR(フランス語アシスタント)が部屋を探しに行く時一緒に行ってそこに引っ越すわ。と。」私は、もしCが引っ越してしまったら自分はどうなるか心細くなるだろうと思った。M(スペイン語アシスタント、同居人)やG(フランス語アシスタント、同居人)もCと一緒に引っ越して、もし私だけになったら何て寂しいのだろうと思った。私は「私も引っ越したいな」と口にしてた。

166) ホストブラザーがこれほど私のことに対して意見を言ってきたのは初めてだった。私はSの意見を聞いて気持ちが揺れていた。

f. 自分ひとりの行動では無いという甘え，安心

140) 自分一人の行動では無いという甘えがそこにはあった気がした。

200) アシスタント達は週末私に声をかけるとき、ドイツ語教師 A (同居人) にも声をかけるようになった。私達は共通の予定があることが多く一緒に断ればよかった。

g. 自分の不満やストレスを相手に気付かれない、言いたくない

30) 3時間の授業が終わると私はかなりホッとした。先生はきっと私のそんな状況に気がついてた。だが私は自分のことにはあまり触れて欲しくなかった。

39) 私はつまらないということがばれないように、興味深そうに振舞い、そして「ありがとう」といって教室を出て行く、そんなことをいつも繰り返していた。

h. 誰かに嫌がられることをしたくない、言いたくない(中立の立場でいたい)

53) 私は T と S の悪口に同調することはあっても自分から積極的に言うことはしなかったし、逆にホストファミリーを擁護するような発言もしなかった。

139) 私はかなり複雑な気持ちだった。ホストブラザー S やその友達 D (同居人) とは私はとても仲良かったのだ。私はアシスタント達 (外国人学生) の方の様子や S や D、ファミリーの方の様子を両方気にせずにはいられなかった。でも S や D に話し掛けようとしても話し掛けられるような雰囲気ではなかった。

i. 自分の気持ち、考えが整理できない、どう行動するべきかわからない

142) 私はこのような微妙な状況で自分がどう行動するべきなのかよくわからなくなっていた。ホストマザーやホストティーチャーの意見を聞きながら自分の中に罪悪感のようなものが芽生えてきていた。

160) 他のアシスタント達とは今まで通り学校で話していた。しかし彼らの会話は少しずつ私の知らない話題が増えていった。彼らは同じ家に住み、私は別の家に住んでいるのだから当然だ。ただ困ったのは彼らの会話にはホストマザー P や、ホストブラザーの友人 (同居人) D に関する悪口や皮肉が度々出てくることだ。私はそういう時、どういう反応をすればいいのかわからなかった。彼らがファミリーの事を話の種にして笑いものにしてるのは明らかだった。だが私には「P 達は元気？」と普通に聞いてくる。私はその何とも微妙な空気の中で平静を保つのが精一杯だった。

j. 反論できない、不満が言えない

57) 確かに暇だったが、面倒なことになるくらいなら我慢しようと思った。

114) 私はあまりの勢いに謝る事しか出来なかった。自分は彼女が皆とおしゃべりできる時間があつたほうが良いと思つてたのだという言葉は全く出てこなかつた。その日の気分は最悪だつた。

137) 今までPに対する不満がたまつていた事と、不満があつても全く口にする事が出来なかつた自分から抜け出したいような気持ちも働いていたように思う

. 他者を必要とする自分

k. 誰にも相談できない

183) 私はこの問題に関して話せる人間が誰もいなかつた。私の周りの人間は皆今回の事件に関つていたのだ。自分の発言によって問題をややこしくしたくはなかつたし、自分が悩んでいるということも気付かれたくはなかつた。発言によって周りの人に影響を与ええるのも嫌だつた。

190) 基本的に日本の家族や友達には自分が精神的に辛い状況に立たされていることを話さないでいた。こんなややこしい事を話しても相手は困るだろうし、第一どんな状況が想像がつきにくいだろうと思つていた。自分の中である程度気持ちの整理がつくまでは人に話さないほうがいだろうと思つていた。

l. 誰かに相談したくてたまらない

192) しかしそう思いながらも私は精神的にパンク寸前の状態だつた。きっと誰かに聞いてほしくてたまらなかつた。今まで日本でもひどく悩んだり、精神的に辛い状態に陥つたりすることはあつた。しかしそんな時でもいつも私の話を聞きだして、支えてくれる人がいた。私はそういう人の存在を常に必要としてきた人間かもしれない。そういう人たちの存在に甘えてしまう自分から抜け出さなくてはと思ひ、イギリスに來たはずだつたが、いざ自分が辛い状態に立たされると私は彼らの存在の大きさに改めて気づかされるのだ。

197) 私は自分の悩みをドイツ語の新任教師 A(同居人)に話したい衝動に駆られた。

m. 自分を理解し支えてくれる存在があり難い

154) 彼らが私のことを心配してくれていたのだと思つると何とも言えずうれしなかつたのだ。

203) ドイツ語新任教師 A は本当に心強い存在だつた。A は私が学校でアシスタント達(以前の同居人)との関係に苦勞していることも、家でホストマザーたちがアシスタント達(以前の同居人)にどのような意見を持っているのか、そのため私がホストファミリーに対してどのようなプレッシャーを感じているのか、全てを理解してくれたのだ。私は A に救われた気持ちだつた。

n . 冷静で客観的な意見があり難い

153)そしてI(近所に住む友人)から第三者としての意見が貰えてとても良かったと思った。

202)問題に関わっていないA(ドイツ語新任教師)の意見が聞けるのは私にとって、とても良いものであった。

o . 共感される、認められることによって気持ちが楽になる

195)彼女は私の辛い状況を理解してくれ、共感してくれた。そして私の性格をわかった上でのアドバイスや励ましの言葉をくれた。私は大分気持ちが楽になった。彼女は私のことをわかってくれる。認めてくれる。あと一ヶ月がんばれるような気がしていた。

199)ドイツ語新任教師A(同居人)は「気にしないほうがいいわ。あなたは何も悪いことをしてはいないじゃない。よく考えてみて、たった4人のことなのよ。大した問題じゃないわ。他にあなたの事を好きな人間はたくさんいるのよ。今は辛いだろうけれど、この経験はあなたにとって将来必ずプラスになるわよ。」と言ってくれた。私はAに話したことによって気持ちが楽になっていた。

p . 自分の気持ちをわかってもらいたい

148)私はその時の複雑な気持ちを全て正直に話した。

152)彼女は(イギリスにおいて)外国人であるので私の気持ちをとても分かってくれているような気がしていた。

q . 子供達の前に立つことによって自分が支えられている

180)実際に気分が落ち込んでしょうがないというとき、次は授業だ、子供たちの前に立つのだ、と思うことによって自分が保たれているような気がした。私は子供たちによって支えられていたのだ。

r . 自分は役に立っている、認められていると感じる喜び

84)ホストファミリーは日本人学生Mとどうしても会話が上手く行かない時、私を読んで通訳するように言った。Mがどう感じていたのかわからないが、私は自分が役に立っている気がして嬉しかった。

174)一人で授業をするクラスも持っていたため、空き時間も授業のための準備などやることがたくさんあった。春のように時間が余りすぎていつも肩身の狭い思いをしながら学校にいるということはなくなった。日本語教師(日本人女性)Tさんとの関係も以前は授業にお邪魔させてもらっていると言う感じだったが、この頃は協力して日本語のクラスを進めているという感じになっていった。私のクラスに来ている子がTさんのクラスに行った時にうまく話せたり書けたりすると本当に嬉しかった。

178)私は生徒からの声で、このクラブ(Japanese Club)ができた事が本当に嬉しかった。自分の出来ることが少

しずつ増えていっているような感覚がしていた。

s . 自分は必要とされていないと感じる辛さ

37) 私は英語をあまり聞き取れないこともあって、あまり授業の内容は理解できなかったし、ドイツ語や算数の授業に自分が無用ということは充分理解していた。

89) 先生方(料理, ドラマ, 英語などの)は私をクラスに呼ぶのを嫌がった。OFSTED(国の学校検査機関)が来る時に私が教室内にいて、もしその人が私をうまく使えないと減点対象になるからだ。そういったことは冷静になると理解できるがその頃の私は何かやりたいという意欲に満ちていたし、真っ白のタイムテーブルは不満だった。しかもホステイ チャー I は物事をストレートに言う人で、私に「私も多くの先生のポストに手紙を入れて聞いてみたのだけど、皆忙しくて、帰ってくるのは No, Haruko, until OFSTED という返事ばかりなのよ」と言った。私は自分がひどく邪魔者なような気分に陥った。

91) やることが無くても私は月曜から金曜、学校が始まってから終わるまで学校に居なければならないのだ。私は自分がとんでもなく役立たずであるというような気持ちだった。

第五章：ニューカマー支援のあり方についての考察

第4章では筆者自身がイギリス社会に適応していく過程で経験した内面の変化を分析した結果を示した。本章ではまず筆者の分析結果についての解釈を具体的状況の説明も加えながら述べたい。

第1節 分析結果の解釈

筆者の異文化適応のプロセスを時間の流れに沿って捉えてみたい。

まず筆者のイギリス社会への適応は3段階に分けられる。クロス表のログ部分 ~ で言えば「」「」「」である。これらは滞在期間の問題の他に筆者を取巻く環境の変化が影響していると考えられる。

(4月)は筆者がロンドンで他のインターン(日本人22人)と研修を行っている時期である。また個人行動が多く、ホストファミリーとの関わりも薄いので大きな問題を感じることは少なく、A, B など目新しいことに対する興奮の回数が多い。U. 言葉の問題によ

るストレスも日本語が話せる環境であった事、ネイティブと話す機会が時間的に限られていたことからそれほど感じていない。で特徴的だったのはB、多文化が共存している状況に惹かれると何度も感じていることである。

(5月)はスクールインターン活動を開始しており、また自分のレベルよりも高い英語のクラスに通い始めている。そしてホストファミリーとの関わりが非常に密であるという、また日本人との関わりが非常にわずかである。筆者の言語的、文化的マイノリティとしての経験はここからスタートしたと言ってよい。で特徴的なのはU。言葉の問題によるストレスを頻繁に感じていることである。そしてこのことはK。予期せぬ状況に対する不安と関係する。Kは第二章、第三節(2)の表1で言う「外部環境の変化への認知的適合の問題」であると言える。Kにはもちろん文化の違い(行動規範などの違い)から来る不安もあるが、まず言葉が理解できない事によって自分の周りで何が起きているのかが認知できていない状況というのが大きく関係している。またC。イギリスと日本を比較(イギリス側に憧れる)Z。自分の意見をはっきり言えるようになりたい、d、相手が自分に期待する行動をとろうとする、d、相手が自分に期待する行動をとろうとする、g、自分の不満やストレスを相手に気付かれたくない、h、嫌がられることをしたくない、j、反論できないとの結果からは筆者が外部環境(イギリス社会)に「同化」したい、「同化」しようと考えていることが分かる。またE。イギリス人以外の友達に同じ外国人として仲間意識、安心感を覚えているのも特徴的である。

(6月)はF、イギリスの生活に慣れた、Gホストファミリーとの距離が縮まったと感じている。Y。自分がイギリスに来た目的(英語力向上、異文化理解、自己の成長など)を強く意識しており、よってD、日本語、日本のものを避けるということ意識的に行っている。それと同時にM。イギリス人の特徴を批判的に捉えている。Mの感情の具体例を見ても分かるようにこの段階では敵意を感じてはおらず、ただ客観的な視点で捉えているという段階である。

(7月)は(6月)と同様、F、Gの感情が発生していることからイギリス文化への同化が順調に進んでいると言える。

(8月)は特に問題を感じてはいない。夏休み中でインターン活動は行っていない。ホームステイ先での人間関係が非常に良い状態であったのがこの時期である。

(9月)はインターン活動においてもホストファミリーとの関係においても大きな転

換期を迎えている。インターン先（ハイスクール・カレッジ）においては、活動内容推移の部分でも触れたように、この時期活動が一時的に激減し、それに対する不満をホストテイチャに直接伝える、そのことがきっかけでミドルスクールという新たな活動の場を得るという出来事があった。この出来事を通して s、自分は必要とされていないと感じる辛さ K、予期せぬ出来事、状況に対する困惑、不安、を感じている。そしてイギリス社会において Z、自分の意見を伝える事の重要性を改めて感じている。またこの時期は M、N を見てもらえれば分かるようにホストファミリー、特にホストマザーに対して不満（敵意を含む）を感じている時期でもある。これら状況の中で私は、クロス表のグループ、自分自身との対話、の部分を含めて見てもらえれば分かるように、自分自身について何度も自問自答している。

（10月）は同居していた語学アシスタント達が全員引越してしまう、という騒動が起こった。ホームステイ先での外国人学生受け入れの推移を示した際にも言及したが、これによって私はホストファミリーと語学アシスタントグループの間に立たされてしまうこととなる。

9月までは基本的にホストファミリー内で上手く調和するように自分の行動を調整してきた。しかし9月末以降ホームステイ先に外国人学生が4人いるという状況の中で私は自分を外国人学生グループの一員として認識し、グループの一員として行動をするようになった。自分ではそのような自分自身の行動の変化を認識していなかった。ただ、ホストファミリーにとってその変化は明らかであったらしい。そして10月上旬の引越し騒動によって私はそれまで持っていた自分の行動の判断基準を失う事となる。つまり私はそれまで相手の意向を汲み取り、それと調和するように行動してきた。だがこの騒動をきっかけに自分の行動を自分で判断する必要に迫られてしまったのである。しかしながら、異文化という自分自身のこれまでの行動規範が通用しない環境にたたされていた私にとってそれはとても困難なことであった。そこでクロス表のを見てみる。z、自分の意見を伝えたい、a、自分自身で考え、判断し、行動できるようになりたい、d、その場の雰囲気流される、h、誰かに嫌がられることをしたくない、の数字の大きさが目立っている。ここに自分の行動規範の調整を迫られた筆者の葛藤を読み取ることができる。またそのような中で n、冷静で客観的な意見をありがたいと思っている。また p、自分の気持ちを分かってもらいたいと何度も思っている。

(11月)は10月からの流れをうけて語学アシスタント達との関係に深く悩み、ストレスを感じている時期である。そしてk,自分の悩みを打ち明けることのできる存在が周りにいない状況である。(ホストファミリーは問題の当事者であるため相談できない。)そして誰かに相談したくてたまらないと感じている。ここではS,日本人や日本語,日本の物を恋しい,このR.ストレスのたまる環境から抜け出したい,と思っている。また10月11月共にストレスを感じている状況の中で,自分を支えようとしてくれていたホストブラザー達,メールで相談に乗ってくれた日本の親友,過去の間人間関係において辛い時に自分を支えてくれた人達の存在の大きさを痛感している。(m)人間関係が上手くいかないのとは対照的にインターン活動の方は順調に進んでいる。そのことからr.自分は役に立っている,認められている,と感じている。

(12月)は私にとって非常に良い相談相手(ドイツ語新任教師A)が表れる。彼女は問題に関わっていない第三者として,尚且つ語学アシスタント達,ホストファミリー両方の様子を把握できる存在としていつも私の相談にのってくれた。そして私を肯定し,励ましてくれたのだ。Aという存在を得ることによって私は大分気持ちが楽になった。クロス表を見てみると精神的な葛藤がおさまり,同時に,m,自分を理解し支えてくれる存在があり難い,p,共感される,認められることによって気持ちが楽になると感じているのわかる。

イギリス滞在全体を通して何を問題と感じたか

語学力不足によるストレス(J)

予期せぬ状況に陥って不安を抱えてしまう。原因としては周りの人々との価値観,行動規範の違いや,語学力不足により自分の置かれている状況が把握できないということが考えられる。(K)

役割を与えられない時(筆者の場合インターン活動が滞った時)に感じる辛さ(s)
人間関係等の問題により内面的調整を迫られた際に感じる精神的葛藤(グループ,)

自分の問題,悩みを相談できる相手がいない(k)

上記の問題に対して何が自分の支えとなったかー

イギリス人以外の友人の存在(共感し合える仲間)(E)

夜間英語コース（一緒に勉強できる仲間との出会い，語学力向上）

語学力の向上（V）イギリス人以外の友達との会話（E）

役割を多く与えられることによって解消された（r）

と 理解と共感を持って相談に乗ってくれる存在，その人達からの客観的なアドバイスによって軽減，解消された。（r. n. o）

第二節 ニューカマー支援のあり方についての考察

以上の結果から推測できる有効なニューカマーへの支援は

- 1．日本語教室などによる日本語支援，
- 2．外国人同士の交流，情報交換の場の提供
- 3．社会参加（仕事の確保，ボランティア活動への参加，地域行政への参加など）を促す。
- 4．問題を抱える外国人に対して相談活動を行う

の4点である。第4点の相談活動に関しては，理解と共感を持って相談に乗ると言う姿勢が重要である。

- 1．日本語教室などによる日本語支援に関しては民間の日本語学校はもちろん、地方自治体や市民団体などによる日本語教室が各地で開かれている。そしてボランティアによる日本語支援が盛んに行われている。例えば筆者がボランティアをさせていただいている京都 YWCA 内にも日本語教室があり，日本語教師の資格を持っている方及び，日本語教師になる為の勉強をしている方がボランティアとしてニューカマーに日本語を教えている。
- 2．外国人同士の交流，情報交換の場の提供に関しては，まず1の日本語教室が良い交流の場になっている。また京都 YWCA・APT の子どもプログラムでは外国籍の親を持つ子ども向けのサマーキャンプなども行っており，外国人同士の交流を促進している。また別の例として APT と協力関係にある，京都のパガサ・フィリピン共同体は500人以上のフィリピン人が行き来する場になっており，日曜を中心に様々な催し物やイベントが行われている。
- 3．社会参加を促すに関しては，同志社大学今出川キャンパス近くにあるバザールカフェが良い例であると思われる。バザールカフェは外国人スタッフと日本人のボランティアで経営されている。外国人は料理を作ることで（韓国料理、タイ料理など）お金をもらう。

そして日本人は全てボランティアとしてカフェ運営に携わっている。また APT の活動には滞日期間の長い外国人がボランティアとして積極的に活動している。地域行政への参加について、最近では「外国人会議」を独自に設ける自治体が現れている。川崎市の「外国人市民代表者会議」、東京都の「外国人都民会議」などがそれである。

4. 問題を抱える外国人に対して相談活動を行う、の非常に良い例として、京都 YWCA・APT が 1991 年より行なっている滞日外国人のための電話サービスが挙げられる。APT ではタイ語、タガログ語、英語、中国語での相談を受け付けており、電話による情報提供や地域の専門機関と協力しながら問題解決のための活動を行なっている。APT に寄せられる相談内容は大きく分けて労働、結婚、離婚、ビザ、子どもの問題などである。ニューカマーの状況が複雑化するのに伴って、その問題も年々難しくなっているという。

以上筆者自身の異文化経験の分析結果から予測した有効なニューカマー支援 4 点についてそれぞれ市民団体などによって現行で行なわれている取り組みを例に挙げた。

前述したように、第 4 点目の相談活動においては複雑な状況下で苦しむ相談者を一個の価値ある存在として尊重し、理解と共感を持って相談に乗るといった姿勢が重要である。周囲に頼れる人が少なく精神的に不安定な状況に立たされている外国人にとって、自分を理解し、共感してくれる存在は大きな支えとなりうるものである。

また、第 3 点目の社会参加を促すが、第 1、2、4 点目と性質が異なるものであるということも付け加えたい。第 1、2、4 点目が、ニューカマー個人が抱える問題を解決するための活動であるのに対し、第 3 点目は、日本社会全体のあり方を変えていく必要があるものである。外国人が多様な役割を担うことが出来る、お客さんとしてではなく、社会の一員として関わって行くことが出来る社会作りに取り組んでいく必要がある。

今回の研究では新しいニューカマー支援のあり方を考察できるような発見は無かった。だが、上に挙げたようなニューカマー支援が、日本で生活する外国人にとって必要不可欠なものであるということを確認する事ができた。現在地域では、上記に挙げたものに限らず、様々な方面からのニューカマー支援が行なわれている。今後もこうした活動が盛んに行われていけば、外国人の置かれる状況も少しずつ改善されていくに違いない。また、こうした活動は、お互いの差異を認め合う事の出来る社会づくりのための活動である

といえる。そしてそれは、外国人の問題だけではなく、日本人間の差別問題（障害者、被差別部落など）の解決にもつながっていくものである。

筆者がイギリスでの人間関係において様々な問題を抱えた事は前述した通りである。しかし筆者はイギリスの魅力は何であるかと聞かれたら迷わず「多様さ」であると答えるだろう。様々な国籍、民族が入り混じる社会において世界中から集まった人々と共に暮らすことは私に多くの発見と感動を与えてくれた。また多様な価値観が存在するその空間において「自分は自分でいればいい」という感覚を何度も味わい、癒される思いがした。私達の住む日本社会も民族、文化、宗教、立場の違いを超えて人々と共存できるような社会、「多文化共生社会」になって行けばと願う。そして、その実現ために自分ができることをこれからも少しずつやっていきたいと思う。

(40字×30行), 36 ページ

[400字詰め原稿用紙に換算すると78枚]

文献

安保則夫編, 1998, 「人権と共生のまちづくり」

上田正昭編, 1998, 「ハンドブック 国際化のなかの人権問題」, 明石書店

江淵一公編, 1997, 「異文化間教育入門」, 玉川大学出版部

川村千鶴子編, 1998, 「多民族共生の街・新宿の底力」, 明石書店

京都 YWCA・APT, 2003 「APT10 周年 Together with People from Asia」, 京都 YWCA・APT

佐藤群衛, 2003 「国際化と教育」, 放送大学

「第4回移住労働者と連帯する全国フォーラム関西2001」開催地実行委員会, 2001, 「第4回移住労働者と連帯する全国フォーラム, 関西2001」報告集, 第4回移住労働者と連帯する全国フォーラム関西2001」開催地実行委員会

中川明編, 1998, 「マイノリティの子ども達」, 明石書店

ヒューマンライツ大阪, 1998 「問われる多文化共生 教育・地域・法制度の視点から」, 解放出版社

渡戸一郎, 川村千鶴子編著, 2002, 「多文化教育を招くマルチカルチュラルな日本の現実のなかで」, 明石書店

渡辺文夫編 1995「異文化接触の心理学」, 川島書店